

私は 1995 年 11 月 5 日、伊達福音教会で夫とともに洗礼を受けることができました。夫 56 歳、私 53 歳でした。

私は小学校の時に、友達にさそわれてカトリック教会に行って、初めて天地万物を造られた神様がおられ、その御子イエス様は十字架で死なれたということを知りました。その神様は今もいつも私を見ていられていることにおどろき、なぜか安心しました。

大人の人にならって主の祈りを覚えました。いつかの学びの中で、野の花のたとえを通して「明日のことは思い煩うな。明日のことは明日みずからおもいわずらわん。一日の苦労は一日にて足れり」という当時文語体の聖書でしたが、かみくだいて話してくださり、あまりいろいろなことを心配しなくともよいんだと単純に思っただけでホッとしていました。

子供なのになぜそんなことを思ったのか考えてみると、太平洋戦争の中に少し置かれ、当時樺太の北のほうに住んでいましたが、8 月 15 日戦争が終わったはずなのに、ソヴィエトの爆撃を受け、急に無がい車に乗せられて南下、船に乗ってもう少しで北海道に着こうというときに、また攻撃を受けて沈む寸前にまでなり、やっとの思いで助けられました。その翌年には一緒に帰ってきた弟がなくなり、知る人のいない中で、おばと二人、二月の寒い中で心細い思いで火葬場に行きました。あの時代多くの人が混乱の中で、まだ安定しない生活の中で不安をかかえていたことは、四歳くらいの子供の心にも強く残っていて、落ち着かない生活の中で神様の存在を知ってホッとしたのだと思います。その後にもいろいろなことがありましたが、めげずに歩ということが与えられたのだと思っています。

その後、転居して教会へ行くこともなく 40 年を過ごしたことになります。人を通しての働きかけもありましたが、結婚して聖書を学ぶ機会もあり、それで良しとしていました。そんな中で有沢先生の教会の勉強会にさそわれ、迎えに来てもらって半年ほど通いましたが、夫の転勤によって、また離れました。学びの中で自分の罪に気づかされ、イエス様の十字架と死が私のためであるとはっきり思うことができました。それまでの年月の中で、何度も生かされ赦されそれは神様だけでなく日々かわる多くの人にも赦されていることにも気づかずにいました。我の強い者が我を折らなくては平安を得られないことも知らされ、神様のことをもっと知らなくてはと思うようになりましたが、夫の家は神道、私の家は仏教という中で育ちましたから、よくわかりあって二人一緒に教会に行きたいと強く思うようになりました。

その時には主にゆだねるということをよくわかっていませんでした。それまでの生活の中で、人の主義主張は変えがたく、信仰についても同じことと思っていて、家の中でそのことを争うことがあるのをひどく恐れて動けませんでした。「すべての事に時がある」というみ言葉も自分勝手に思っただけで何度もその時をのがしていたのでは、と思うこともありました。

子供が「人間はどこから来たのか」と私に聞いたので、これは教会へ行かせる良いチャンスだと思い、連れて行きました。先日来られた小林先生の奥様が、当時の私が子供を置いて「よろしく」と言ってサッサと帰っていった、と笑われました。その当時忙しく 1 週間のつじつまをその日に埋めていたのです。

けれど子供たちを通して聖書のお話が家族の中で自然にできるようになってきたのは幸いでした。その当時テレビで「大草原の小さな家」というドラマがあつて、夫はその父親

に感心し、その洞察力と人に対する思いやり、どうしたらあのような考え方ができるんだ
といつも感心し、その土台に聖書があることを知って行きました。

けれども夫もとても忙しく過ごしていましたから、すぐに教会とはなりません。転勤で苦小牧を離れヒザの故障によって少し方向を変えた中で静内。そして夫のほうから「教会へ行こう」と声が出され、佐藤先生の教会へ行きました。少ない人数の中で夫が時々いねむりをするので私は人を気にしてヒヤヒヤしていましたが、次の週も行こうと声をかけられホッとしました。

伊達にまたもどり、仕事にも慣れて教会へ行けるようになり、聖書を読むほどに疑問が出て、完全に知ることのできないのなら、その中に入って知って行こうという夫の決心のもとに洗礼を受けさせていただきました。その時は 100 匹の羊の中の 1 匹をもさがしてくださる神様に信頼して従うことを握っていました。私は洗礼を受けるまで、気が付くと「わが行く道いついかなるべきかはつゆしらねど主はみこころなしたまわん」という讃美歌を口ずさんでいました。

「あなたがたは恵のゆえに信仰によって救われたのです。それは自分自身から出たことでなく、神からの賜物です。」(エペソ 2 : 8)

教会へ通うようになってその言葉を実感しました。「後の者が先になる」とみことばがいうように、私は夫によってやっとクリスチャンになることができました。神様がそのように導いてくださったと今は思っています。

夫は何年か気持ちを鬱々とさせて心配しましたが、退職して解放されたのか、苦小牧へ帰って元気になり、教会生活を楽しく送ることができました。夫は救われて 10 年ほどで天に召されました。夫の聖書の中で、詩篇 39 : 4 「【主】よ。お知らせください。私の終わり、私の齢が、どれだけなのか。私が、どんなに、はかないかを知ることができるように。」という箇所が丸でかこまれていました。どんな時どんな思いで・・・と思いました。最後まで穏やかに過ごせましたから、すべてを神様にゆだねていたと思います。

その夫が亡くなってこの三月で 10 年が過ぎました。その後母が車いす生活になり、それにとまって家のリフォーム、その中の整理また介助のため毎日通う日々となりましたが、その間たおれもせず風邪もひかず、礼拝や教会の諸行事にも参加できたことは神様のあわれみによる恵みの日々だったと思います。

コロサイ 3 : 15 「キリストの平和が、あなたがたの心を支配するようにしなさい。そのためにこそあなたがたも召されて一体となったのです。また、感謝の心を持つ人になりなさい。」という言葉に励まされました。

自分勝手な者です。その小さな祈りをも神様は聞いてくださり、その神様の愛のゆえに歩ませていただいたことにただ感謝しています。これからもこの恵みの中を歩いてゆきます。